

### <書評>時津啓著『参加型メディア教育の理論と実践：バッキングラムによるメディア制作教育論の新たな展開をめざして』（明石書店、2019年11月、263頁）

坂本， 旬

---

(出版者 / Publisher)

法政大学図書館司書課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究

(巻 / Volume)

2

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

142

(終了ページ / End Page)

145

(発行年 / Year)

2020-09

法政大学図書館司書課程  
メディア情報リテラシー研究 第2巻1号, 142-145

(書評) 時津啓著『参加型メディア教育の理論と実践—バッキンガムによるメディア制作教育論の新たな展開をめざして—』(明石書店、2019年11月、263頁)

坂本 旬  
法政大学

メディア・リテラシーを研究もしくは学習する人ならば、イギリスの著名なメディア・リテラシー教育研究者であるデイビッド・バッキンガムを知らない人はいないであろう。数多くの著書の中でも2003年に刊行された『Media Education – literacy, learning and contemporary culture』は日本語にも翻訳された。本書はそのバッキンガムの理論と実践を体系的に検討した本格的な研究書である。

本書における著者の視点は次の言葉に端的に表現されている。「理論はイギリス、実践はカナダ(日本)といった安易な二分法を避け、イギリス固有の歴史的社会的文脈を重視すべきである。そしてその文脈にバッキンガム理論を位置づけ、彼の実践も踏まえたバッキンガム解釈、バッキンガム理論の応用可能性を検討すべきと考える」(p.27)。これまでのメディア・リテラシー研究は、もっぱら理論はイギリス、実践はカナダまたは日本といった二分法に基づいたものだったと彼は指摘する。つまり、これまでの研究に欠けているのはイギリスのメディア・リテラシーの理論と実践および社会的・歴史的な文脈との関係である。とりわけバッキンガムの参加型メディア教育の理論と実践に焦点を当てて検討しているが、彼以外にもレン・マスターマンやスチュアート・ホールについても多くの紙面を割いて検討されており、決してバッキンガムだけを対象とした研究書ではない。

また、本書のタイトルともなった「参加型メディア教育」とは、「メディアの教材化を通して、メディア・コンテンツを制作する試み」(p.80)と定義しており、ジェンキンスの「参加型文化」とは重なる点が多いが、ジェンキンスがスキルに焦点を当てるのに対して、バッキンガムは概念学習に焦点を当てる点が異なると時津は指摘している(p.113)。

本書の構成は以下のとおりである。

序章 研究の課題と先行研究の検討

第1章 イギリスのメディア教育におけるバッキンガムの位置

第2章 メディアの教材利用と文化形成の連続性

第3章 バッキンガムにおける抑圧／自律の二元論とその学校教育論としての可能性

第4章 メディアの拘束に対する抵抗可能性

第5章 参加型メディア教育の政治的展開—イギリス黒人の文化形成とバッキンガムによる教育実践の再解釈

第6章 参加型メディア教育の文化形成的展開—フレイレの理論展開とバッキンガムによる教育実践の再解釈

第7章 政治的／文化形成的参加型メディア教育としての可能性

終章 参加型メディア教育の可能性と課題—新たなメディア教育のために

第3章のタイトルには「抑圧／自律の二元論」という用語が見られるが、この用語は本書のかなめの一つと言える概念である。3章で扱われているのはバッキンガムとマスターマンの論争である。この論争はメディア・リテラシー研究者にはよく知られた論争であり、バッキンガムは、メディアのイデオロギー性に対するマスターマンの主張を批判した。彼によると、生徒はメディアのイデオロギーに対して自律的であるという。この論争に対して、時津はメディアがイデオロギーを持っているという特性論と生徒がメディアのイデオロギーに対して自律性を持っているかというメディア—生徒関係論が混在したものと指摘する。この二つの要素が混在し、抑圧か自律かという単純化された二元論に陥っているという。これが筆者のいう「抑圧／自律の二元論」である (p.87～90)。

マスターマンはメディア批判を主軸にし、バッキンガムはメディア制作への参加を主軸にする。両者はメディアのイデオロギー性と生徒の自律性をめぐって激しく対立しているように見える。そして時津は前者を「メディア・リテラシー論」と呼び (p.11)、メディアのテキスト分析を「謎解き」と呼んでいる (p.91)。時津は二人の論争について「論争という形式がもたらした強調点のちがいに過ぎない。何よりも彼らは、抑圧／自律の二元論を共有している」と指摘している (p.98)。つまり、抑圧か自律かという対立ほどの違いは両者にはないということになる。また、こうした両者の二元論には、メディア教育の制度化とカリキュラム化という社会的状況が影響しているともいう。

しかし、時津は明らかにマスターマンよりもバッキンガムの理論に肯定的である。マスターマンに対してはメディアの抑圧から生徒を「解放」することを求めるために、隘路に陥るが、メディア制作の教育実践を志向するバッキンガムの参加型メディア教育は「メディアとの関係を構築していく社会的インフラとしての可能性を有している」と評価する (p.103)。こうして、バッキンガムのポスター制作の実践などの分析を通して、バッキンガムのメディア教育の特徴を「生徒による振り返りを重視した概念学習」とであると結論づけるのである。 (p.133)

上記の問題は、時津が第6章で論じたバッキンガムと批判的教育学の関係にも及ぶ。なぜならば、バッキンガムは批判的教育学を批判しているからである。時津によれば、ジルーは「ポピュラー文化＝イデオロギー装置」とみなしているため、「その作用によって生徒が特定のイデオロギーや価値観へ回収される危険がある」と考える。これに対して、バッキンガムは「生徒はポピュラー文化についてすでに多くのことを知っており、その中で「楽しみ」や「喜び」をもつ存在」としてとらえている。そしてバッキンガムのジルー批判の根底には「抑圧／自律の二元論」

があるという (p.170)。評者が興味深く感じたのは、ジルーとバッキングガムとの比較に際して、バッキングガムの批判を必ずしも肯定していない点である。時津は、ジルーのテキスト分析はマスターマンの「謎解き」の実践と同じではないという。そして「ジルーのポピュラー文化論に見られる生徒とは、メディアとの接触やメディア経験を反省的に振り返り、意識化する存在」だという。こうした観点をバッキングガムは見逃したのだというのである。

時津は第7章でさらにバッキングガムのメディア制作の実践を紹介しつつ、バッキングガムの限界を指摘する。ひとことで言えば、メディア制作の政治的プロジェクトとしての可能性である。時津は「バッキングガムは、メディア制作の教育実践が制度への介入、すなわち政治的プロジェクトとしての側面を看過した。その結果、生徒らのコンテンツ制作がメディア文化の形成と直結する可能性を把握することができなかった」と主張する (p.196)。この視点は終章にも受け継がれ、「本研究は参加型メディア教育における学びに、文化的作業を通じた政治的／文化形成的プロジェクトという二重構造を見出した」とまとめている (p.219)。

本研究書はバッキングガム中心に、イギリスのメディア教育理論と実践を、社会的背景を含め、立体的総合的に分析したという点で、画期的であるといえる。とりわけ、カルチュラル・スタディーズやメディア・スタディーズとイギリスのメディア教育との関係を緻密に描き出すことに成功している。今日の日本におけるメディア・リテラシーをめぐる議論にとっても、その基本原理を考える場合にぜひ参照すべき研究だと言える。

ただし、検討すべき課題もいくつか残されているように思われる。まず、第一に、本書ではマスターマンのメディア批判教育をメディア・リテラシー論と呼んでいる点である。ではバッキングガムはメディア・リテラシー論ではないのだろうか。この問題についての詳細な検討はされておらず、バッキングガムの「メディア教育」概念を「メディア・リテラシー教育」と訳すべきではないと論じているだけである。こうした日本の文脈に合わせた意識が研究者にとって大きな問題を孕んでいることは評者も同意する。しかし、バッキングガム自身もメディア・リテラシーを定義しており、マスターマンにのみメディア・リテラシー論と名付けるのは混乱を招くのではないだろうか。

第二に、イデオロギーに対する把握である。マスターマン・バッキングガム論争の主たるテーマがイデオロギーに対する理解の仕方であった。バッキングガムの批判に対して、バッキングガムはマスターマンのイデオロギー概念を「虚偽意識」と同一視したが、マスターマンはこの見方に強く異を唱えた。支配的イデオロギーを支配的な階級が上から下へ押し付けている観念にすぎないという見方は、メディアの中の矛盾や葛藤を説明できないことをマスターマンは指摘している。マスターマンのイデオロギー論は明らかにアルチュセールの影響を受けており、バッキングガムの理解は一面的であるといえる。しかし、時津の理解もまた、バッキングガムの理解と基本的に変わらないように思える。メディアからの抑圧と解放という発想はそれ自体が二元論であり、マスターマンが依拠したイデオロギー論に反する。したがって、「抑圧／自律の二元論」自体が本当に正しいのだろうかという疑問に繋がる。

第三に、ジルーらの批判的教育学に対する理解についてである。本書ではマスターマンの理論

の後にジルーの理論が登場するようになる。確かに、ジルーの境界教育学のコンセプトが描かれた『Border Crossing』は1992年の出版であった。しかし、ジルーの『Ideology Culture & the process of schooling』は1981年、『Theory & Resistance in Education』は1983年であり、マスターマンの『Teaching the Media』(1985)よりも早い。つまり、マスターマン自身が批判的教育学の影響を受けて『Teaching the Media』を書いたと考える方が自然である。ジルーが依拠する「差異の哲学」やフレイレの教育論はマスターマンの理論にとっても重要な土台であった。

また、境界教育学はその内容から、批判的教育学の一部と考えるべきであろう。そのため、評者は批判的教育学とマスターマンの理論を同時代の理論として見なすことによって、マスターマンの理論の影響もより明瞭になると考える。実際、カナダのメディア・リテラシー教育運動においても、アメリカへの展開においても、マスターマンの理論と批判的教育学はともに語られることが多く、両者は密接に関わっている。その一つの理論と実践の形が「批判的メディア・リテラシー」の潮流である。

第四に、メディアの概念についてである。筆者はメディアをマスメディアの意味で使っていると自身も述べているが、同時に今井康雄のメディア理論との接合についても検討している。ただし、この検討は成功しているとは言い難く、結果として本書の結論に影響を与えたようには見えない。今井のメディア論はメディア・リテラシー論とはかなり異質であり、メディア概念も大きく異なる。メディア概念そのものに対する検討をより深めた方がよかったのではないかと思われる。

2019年、バッキンガムは日本を訪問し、法政大学でも講演とシンポジウムを行った。その後、バッキンガムはデジタル資本主義批判を土台とした『The Media Education Manifesto』を出版した。近年のバッキンガムはメディア批判を強調する。もちろんここでいうメディアとは、単なるマスメディアではなく、ソーシャル・メディアおよびそのプラットフォームを含んでいる。結果として、バッキンガムとマスターマンや批判的教育学の潮流との距離はますます小さくなりつつあるように思える。しかし、このような議論をする際にも、イギリスのカルチュラル・スタディーズとメディア教育およびメディア・リテラシー研究の源流を確認することは極めて重要であり、本研究書はその道標となるだろう。メディア・リテラシー研究にとって、カルチュラル・スタディーズは決して過去の学問ではない。今日のメディア・リテラシー研究にとっても絶えず参照されるべき学問なのである。そのためにも、日本のメディア・リテラシー研究者だけでなく、学習者にとってもぜひ読んでいただきたい一冊である。